



： 卷 頭 言 ：

農家と農村を守りたいから悩みながらも頑張りたい

(財) 日本植物調節剤研究協会 評議員 富久保 男
(財) 日本植物調節剤研究協会 近畿中国四国支部長

自分の存在感が感じられるときに 自分のエネルギーが満ち溢れる

昭和47年の29才から平成15年の59才までの30年間、私は県の農業試験場で主に水稻と麦類の栽培技術の開発、水稻品種育成に携わりました。米余りの始まりから水田の4割転作までずっと、水田農業と農山村の衰退と共に歩んできました。それでも試験研究は大好きでしたからためらいはありませんでした。農家から喜んでいただいたことも多かったです。しかし自分が農家と農村社会にどれほどの役に立っているのかという空しさは今も同じです。

10代、20代の高校・大学時代は農業の曲がり角と言われたが、学生、研究者、普及員、団体、稲作農家が多収・良質を目指しており、同じ思いでいられたと思っています。現在も、除草剤や雑草防除技術は見事な発展をしており誇りに思う反面、今の稲作農業、農村の衰退ぶりをみれば悔しさのほうが先立ちます。

農山村は住民・大規模農家一人では守れないのです。少人数では出来ない事があるのです。農村の盛衰は活気ある土地利用型の稲作が続けられるかどうかにかかっています。

人生は自分で切り開けない事もある

農業試験場に転勤になる前の昭和44年から3年間は県の出先機関で、戦後の開拓行政の解散や営農指導にも携わりました。そこでの仕事は、昔のことで、また私の専門分野では無かったのに、今でも鮮明に脳裏に焼き付いています。国の補助事業で離農促進もやりました。管内60戸余りの開拓農家のうち2戸が離農するのを手伝いました。離農後の就職先で安定した生活が出来たかどうかは分かりませんが、開拓地での生活ぶりを見れば、個人的には役立つ仕事が出来

たと、今でも悔いてはいません。

戦後の食料難、就職難時代でしたから開拓農家は皆耐えて頑張ったのだと思います。多くの開拓農家の方が頭脳明晰で、挫折のたびに再チャレンジされたようです。私の見る限り、離農を決意された開拓農家は水田を持たず、急峻な山に囲まれた自然と畑地と寂しさと、不便さには勝てなかった、と思っています。

人間の一生は、切り開くものと思っていますが、時の流れに身を任せる以外どうにもならないこともある。当時、私は若輩者でしたが、優秀で実直な彼らの苦労と悔しさに涙して、若くはない門出を祝福しました。

当時の開拓地や開拓農家の姿、言葉を思い浮かべる度に、現在の日本の農業と農山村と農家の姿を重ね合わせてしまうのである。

今の農村と農業には押しつけや同情でない 優しさを。そこはそれに答えてくれるはず

さて、平成19年度から始まる担い手農家、集落営農、農業法人を中心とした日本の農業が農山村や多数の兼業農家にも元気が出るようになることを心から期待しています。農業収入を当てにしない収支の合わないゆったりとした稲作も必要です。昔から、高低差の無い水田を造成し、梅雨の雨を導いて湛水し、日本に合った品種を残し育成した稲作は目映いばかりの日本の文化です。しかし、つらいけど余るほどの米は作れない。「どういう視点で対処」が必須。

半鐘が盗まれても気づかぬ住民、我が子や親を忘れて遊ぶ私、堤防は車からのゴミ捨て場、子供に危険だから夏場の用水の水位を下げろ、教育・給食は学校の責任、責任逃れのためのオンリーワンと、イノシシやシカに畑・屋敷に攻め込まれる農家・農村とは少し分けが違います。